

如何とする能はず、明治八年十一月千島樺太交換條約の締結せらるるまで、千島は全く露國の所領となりたり

## 錢屋五兵衛

○錢屋五兵衛 五兵衛の來歴を志士の歴史と併記すること、玉石同匠の嫌なきにあらざれども、彼が世界を以て商業者の領域となし、政府の禁令を顧みず、大船を造りて外國貿易を爲せしは、封建蟄居の時代に稀れに見る所の心膽なり、又幕府執權中邦人海外貿易を云ふ者、必らず錢屋五兵衛を云ふ故に此に採録す

五兵衛は加賀國石川郡金石の人、其先は能美郡清水村の農なり、七世の祖市兵衛に至りて宮之腰浦(即金石)に移り、清水屋の號を以て金錢兩替を業とせり、世人が彼を錢屋と云ふは、彼の兩替商たりしに由る、市兵衛より五代を経て初代五兵衛となり、今云ふ錢屋五兵衛は第三代の五兵衛なり、彼幼名を茂吉と云ひ、金石附近の船商木谷藤右衛門に就て航海貿易の業を習ふ、豪膽にして才略あり、加賀藩より其領内に松前産の干鰯を肥料とするの許可を得しを機とし、彼は其所有船を松前に廻して鰯を買ひ占め巨利を博し、木谷藤右衛門と比肩する者となれり、天保年中藩内饑饉す、五兵衛は藩の許可を得、加賀藩御用の名義の下に、其所有船を諸國港灣に寄せ、大

に貿易の利を得、之れに依りて藩の財政を整理すると同時に、自分は加州領内無比の富豪となれり、彼は其蓄積したる資力を以て河北瀉を埋立て、三男要藏なる者の資産と爲んとし、藩の許可を得て起工せしも、五兵衛が此工事に石灰、石油等を使用せし爲め、近傍の魚類悉く死し且つ其死魚を食せし者皆吐瀉病に罹るの慘狀を呈せしより土人之を藩に訴ふ、嘉永五年九月之れが爲め五兵衛父子は獄に投せられ、五兵衛は十一月獄中に死し、其子要藏は嚴重なる糺問を受け、諸帳簿を檢査したるに、五兵衛一家は多年國禁を犯し、海外貿易を營みたる事實發覺せり、又江戸西丸出火の時幕府は會津より木材を取らんとしたるに、其山林には早く加州藩御用の札を掲たり、幕府直ちに加州藩に就き事實の有無を質せしに、藩には毫も斯る事なしと答ふ、幕吏は之を以て五兵衛の木材買占策に出でし者となし、結局數罪俱發となり、五兵衛は獄中に死せしを以て其死體を鹽漬とし、決落後磔刑を宣告し、長男次男は永牢を申付けられ、三男要藏を磔刑に處し、手代市兵衛は梟首となり、加賀藩士中連累の者十二人に割腹を命じ、金殺船舶其他の財物悉く籍沒せらる、時に五兵衛齡八十二なりと云ふ、五兵衛にして才なく、膽なくば此禍なかりしに、彼は自身の才能

の爲め、此災を買ふ、未開時代の殘虐實に聞く者をして震慄せしむ、當時調書の記する所に依るに彼が所有の財産左の如し

- 一、大判金九十九枚入三十箱
- 二、小判金二千六百六十六枚
- 三、古金三萬六千六百兩
- 四、貳歩金九千三百三十兩
- 五、貳朱金拾六萬五千三百二拾兩
- 六、小玉銀一石貳斗但し二千八百八拾三貫目
- 七、加州國用銀札目方七十貫五百三十目
- 八、百文錢にて五千三百三十兩
- 九、四文錢千七百六拾貫文
- 十、取替銀二十七萬五千三百兩
- 十一、大豆四百八石
- 十二、小豆五千三百石

- 十三、持合米三萬五千四百石
- 十四、三箇國(加能、越)にて八萬五千三百石
- 十五、貳千五百石積船四艘千五百石積六艘千石積八艘八百石積二艘五百石積十艘
- 十六、煙硝藏 一箇所
- 十七、唐物藏 二箇所
- 十八、土藏 七十二箇所

中濱萬次郎

○中濱萬次郎 西人は路易ナポレオンを以て、歐洲帝王中一生涯に最も多くの變化を経たる人なりと云へり、日本の冒険者中、一生涯に許多の變遷を爲せし者少からざれども、ジョンマンジユロー程に許多の變化を経、最後に幸福なる餘生を送りし者なかるべし、彼實名を萬次郎と呼ぶ、マンジユローは米國人が彼を呼びたる名なり、彼は土佐國播多郡中の濱の人、幼にして父悦介を失ひ母に養育せらる、兄弟四人あり、萬次郎は其末子なり、父悦介存命中すら、一家六口辛じて漁村の生活を爲せし者、今は母一人の手にて四子を養育す、其境遇思ふべし、萬次郎は他人に雇はれて

些細なからも、母の生計を助け居たり、天保十二年正月彼は十三回の春を迎へたり、普通生活の者ならば、正月の一半は遊戯の中に経過する者なれども、彼の生計には此餘地なく、同月五日同國高岡郡西濱の漁民傳藏(筆之丞とも云ひ年齢三十八歳其弟重助二十五歳傳藏の子五右衛門十五歳寅右衛門二十七歳と五人乗組み漁業に出掛けたり、是れ即ち萬次郎が九死の中に、辛ふじて一生を捨ふ海上生活の歴史となりし者なり、彼等の目的は鱸を釣んとするにありたり、其役割は傳藏は楫取りの船長たり、重助、寅、右衛門は繩揚げ、五右衛門は楫押、萬次郎はハツシの役目たりし、五日、六日の兩日は一の獲物なし、七日に至り魚群に出遇ひ、彼等鼓腹して喜ぶ間もなく、天候險惡の兆を現し、西北の風襲來り、葉大の漁船將に顛覆せんとす、船長傳藏四人を指揮して、陸地の一方に船を寄せんとするも、狂瀾怒濤殺到し、船は寸進尺退す間もなく日は已に西に落ち、四面暗黒東西を辨するを得ず、彼等半日怒濤との激戦に心身疲勞し柁を押し、櫓を取るの氣力なく、船中相顧みて悄然たりし、八日より十一日迄四日間は激浪暴風間斷なく、加ふるに時々風雪を交え、食物は盡き、衣服は濡れて防寒の用を爲さず飢寒怒浪の三の者彼等の周圍を取巻きたれば、彼等の命數

も刹那に迫りしかと思はれたり、十二日雨少しく休む、遙に天の一方を望むに東南と覺しき方向に雲耶山耶水天彷彿の間に物の隠顯するを認む、彼等今は生死の分界なり、陸地と見ては如何なる手段を取るも之れに接近せざるべからず、五人力を協はせ心に神佛を祈り、東南指して船を遣りしに、果して其物は雲にあらすして山なりし、山なりと雖ども巉巖絶壁船を岸に寄するの手掛なく、日も已に暮れたれば其夜は島の周圍に漂ふて翌日の來るを待てり、明くれば十三日彼等上陸せんとするも、巉巖激浪相戦ひ危険云ふべからず、如何せんと躊躇する間に寅右、五右の兩人身を躍し磯に飛揚り、餘の三人之れに倣はんとする一刹那、船は激浪の爲めに轉覆す、彼等一旦は水底に沈みたれども直に泳ぎ上り、岩角に寄りて後を顧れば今迄五人を乗せ來りし船は岩に觸れて微塵となり哀むべき最後を遂げたり、五人をして九死の中に一生を得せしめたる無人島は、萬次郎自身も何の島なるをや知らず而して彼等數箇月孤島の生活に信天翁アホウドリの肉及其卵を常食としたる所を推すに、多分は現時玉置半右衛門の東京府より借地せる鳥島ならんと云ふ時は正月なり身には温暖を取るべき衣服なく、飲むに水なく、偶、降雨あれば天水を溜め、天

水盡くる時曉起して草木に含める露を嘗め居たれども、約半箇年穀食に離れ、飲用水に渴したる穴居の漂客、今は肉落ち骨のみ秀で、萬次郎の外一人も身の健全なるものなかりき、無人島の穴居素より曆日なし、月の盈虚を數ふれば穴居以來已に六閱月、月の變形より測るに多分は六月五六日の頃なるべし、萬次郎獨り汀に出で食物の不足を補はん爲め、貝を拾ひ居たりしに、海上遙に物影あるを認む、鳥耶、雲耶、將た船なる耶と瞳を定めて見詰たるに、彼等の命運未だ盡きず、此物影は雲にもあらず、鳥にもあらずして、米國の捕鯨船ジョン、ホーランド號にして、其船長は慈悲深きホワイト、フイールドにてありたり、六箇月間穴居死期を待ちたる五人の漂客、今此救命者に遇ふ、彼等の喜知るべし

ホワイト、フイールドは小艇を卸し、百方工風して彼等を救ひ、直ちに鯨獵に出掛け、其布哇國、ホノルル府に著せしは、同年十一月の末なりし、或る日彼等は船長に隨ひ上陸し、ホ府の政廳に出でたるに、政廳亦感愍に彼等を待遇しければ、彼等は深く其恩に感じぬ

ホワイト、フイールドは數月間五人の者を撫育したる中、萬次郎を前途望ある少年なりと見たり、彼ホ府を去らんとするに臨み、四人は布國に住居せしめ、萬次郎一人は自分の郷里に連れ歸り、相當の教育を授けんと思へり、萬次郎始め四人の者に對し、萬一人を連れ行くに異議なきやと問ふ、彼冒險有爲の少年、此福音を聞き、如何に躊躇すべき、彼は直ちに恩人の意見に従ひ、他の四人も之れに同意し、互に無事再會を期して別を告げたり

ホワイト、フイールドは、ホ府出立後、南北大洋を縦横に鯨獵すること二箇年、彼が滿載の捕物に満足して、其郷里なる北米合衆國、マッサチウセツ州、ニウベツドフォールドに歸著せしは、西曆千八百四十四年(弘化元年)にて、萬次郎を撫育せしこと此に四年、彼を愛撫すること幾んど子の如く、呼んで常にジョン、マンと云ひたり

ジョン、マンは船長の家に入りたり、然れども船長は大洋を以て耕田に代へ、世界を以て自分活動の領域とせる身分なれば、長く家に留るを得ず、彼は其知人なる桶職、ジェームス、アレンの家に萬を託し、相當の教育を受けしむることとせり、萬次郎が他日他の漂流者に異りたる、智識を擔ふて歸りしは、之れが端緒なりし  
ジョン、萬性、戸内の生活を好まず、北洋南極に長鯨を追ひ、怒濤狂瀾と戦ふを以て快

事とせり、一日ホーランド號萬次郎を救ひし捕鯨船の乗組員たりしアンテナベシなる者尋ね來り云ふ我は先きにホーランド號の刃刺たりしも、今は捕鯨船フランクリン號の船長となれり、兄を雇ふて乗組員たらしめん爲め、遠く此に來れりと、遠洋漁業はジョン萬の寤寐に忘るる能はざる者、彼は直ちに恩人船長の妻(ホワイトフイールド)は出獵中及び寄留の主人アレンの許可を得、フランクリン號に乗込むこととなる、實に千八百四十六年(弘化三年)四月なり、彼は此捕鯨船に乗り込み、夫より南北二洋を横行し、再び彼の第二故郷なるヘッドボルドに歸著せしは、千八百四十九年(嘉永二年)八月中旬なりしと、彼歸著するや直ちに恩人ホワイトフイールドを其家に訪ひしに、恩人も幸に鯨獵より歸りて家に在り、萬次郎は恩人の不在中に出航せしを謝せしに、彼は少しも意に介せず、却て此航の漁獲多かりしを賞したり、然るに當時合衆國全社會を動搖せしめたる一事件ありたり、即ちカリフォルニア州産金の傳説、是なり、皆云ふカ州に行かば赤手にして萬金を獲ること容易なりと、ジョン萬も此傳説の信者となり、彼心に思らく大洋の旅行は其辛苦も快樂も嘗め盡したり、今よりカ州に行き、黄金滿囊の長者となりて、再び日本に歸ること生涯の

一快事なりと思へども、歸朝は恩人の拒む所とならん、如かず歸朝の事は秘し置きカ州探金のみの許諾を受けんと、其志望を恩人及其妻に告げたるに、彼等も異議なしとの事にて、萬は恩人夫婦を始め、近傍懇親の者に別を告げたるもの、心中カ州旅行は口實にして其志歸朝にありと思へば、恩人夫婦に別るる時は、斷腸の思ありしと千八百四十九年八月下旬、彼は同行三十八人と共に、運送船ステキリン號に乗り船長に請ふて水夫となり、第二の故郷なるヘッドボルドを解纜し、カ州を指して出立せり、此三十餘人は何れも一獲萬金の夢を結ぶ拜金宗、彼等彼岸到達の上、果して黄金佛に出合ひ成佛得脱するや否や、航路漂渺數千哩、南米の岬角を迂回せざるべからず、而して此難航路も彼等に取りては、半日の行程に値せざりしなるべし、翌千八百五十年(嘉永三年)六月船は太平洋岸なるカリフォルニア州桑港に著す、三日滞留の後、ジョン萬はステキリン號の船長より許多の給料を受取り、之を旅費として産金地に向ふたり、彼到着の上直ちに採金の業に就きたるも、豫期の如くに收穫なし、然れども彼は大洋を以て盆水庭池と同視する大膽不敵の青年なり、手中錢厘の旅費なきも、日本へ歸る如きは易易たるものと思へり、特に採金業三十日にし

て銀貨數百弗と、金塊若干を得たれば、彼今は拜金宗の宗旨を一轉し、望郷の念専ら彼が頭腦を支配することとなり、商船ハイラ號が柔港より布哇に行くの舉あるを聞き、例に依り此船の水夫となり、錢厘の賃錢を拂はざるのみか、却て許多の給料を取り、大洋狹しと得意になりて、又舊友の居留せる布哇ホノルル島に向へり、此航約十八日ホノルル著後三日を経て上陸し、漂友寅右衛門を訪ひ、傳藏等を五里以外の農業地より召び來り、四人重助は先きに客地に病死せり、鳩首過去を談し、未來を語り、共に歸朝の策を講したり、然るに五右衛門(傳藏の子)のみは已に客地に妻を娶り夫婦の交際睦しければ、今歸朝の和談を受けて迷惑を感じたるも、評議の上にて彼も歸朝する事に決したるに、後寅右衛門は故障を申出で歸朝に同意せず、自餘の三人(傳藏、五右衛門、ジョン萬)歸朝することに決せり

時に米國商船サラボイド號は清國上海に航せんとす、ジョン萬直ちに船長フイモアに面會し便乗を請ふ、船長曰く余は清國へ行くも日本へは著港せず、然れども風位の都合にて薩州近海を過ぐる日なきにもあらず、若し薩州近海を通航するあらば、漂客の不幸を感み薩摩に上陸せしむるを得んと、是に於てジョン萬は百弗を擲

て英人所有の短艇を買ひ、之れにアドヴェンチュラル(冒險者)の名を附したり、其意此商船日本近海通航の時に際せば、此短艇に乗り琉球若くは薩摩の海岸に漕ぎ寄りんとするにあり

彼等は船長の許を得、嘉永三年十月ホノルルを出で、翌年正月二日琉球沖陸上二里許の處に達す、ジョン萬他の二人に告げて曰く、陸地近し端艇一奮陸地に押し寄せするは此時なりと、三人は厚く乗船中に受けたる船長等の厚遇を謝し、端艇を船側にし最後の別を告げて去る、而して本船は彼等の身上を氣遣ひ、端艇の著岸する迄其場所を去らざりしと、彼等は一隻の端艇を故郷に渡る橋となし、風雨を冒し櫂楫の力にて漸く岸に漕ぎ付けたれども、日は已に落ち風雨怒濤海岸を震動し、上陸容易ならざりければ、巖穴の中に艇を入れ夜の明くるを待ち、翌三日上陸して村人の家を訪へり、是れ即ち琉球國沖繩島南角マブニマギリと云へる村なりし、土人の注進にて村吏來る、一應調査の上村役場に護送せらる、三人の用語は英語なり、土人は土語なり、雙陸の會見に異ならず、只彼等が箸を取り米食するを見て、土人も始めて日本人たるを認め得たり、種種糾問を受くる爲め、琉球に抑留せらるること七箇月、七

月十八日薩州より派遣の官吏に監視せられて村役場を出で、二十九日薩州山川港に著し八月朔日鹿兒嶋城下に達せり、時の藩主は有名なる島津齊彬にてありたれば、衣服腫度何れも厚遇至らざるなかりき、嘉永四年九月十一日薩州藩より幕府への届左の如し

琉球の内摩文仁間切へ當正月三日、小船にて不見馴體の者三人致漂著、相調候處、土佐國高岡郡宇佐浦の傳藏、同人弟五右衛門、其實傳藏の子なり、同國中の濱萬次郎外に傳藏弟重助、同浦寅右衛門、五人乗組去丑年正月、天保十二年漁事の爲め出船難風に遇ひ、無人島へ漂著鳥類等食ひ存命候處、六月三日亞米利加鯨船相通候に付助吳候様頼入、五人乗船西洋の内オーホー(布哇國の中オワフ島の事と知るべし)國へ著船し、萬次郎儀は國へ連れ歸るべき旨申聞、同十一月出帆翌年四月亞米利加へ著船、同所にて數年を経又同地より出帆、オーホー國へ罷越し、共に貨錢稼を爲し罷在、内亞米利加船清國へ渡る由承り、本國へ送り届吳候様申入候處、未渡海由にて相斷り候故、傳馬買受便船可致候間、日本之地と見受候はは卸吳候様頼入右重助は五年前病死、寅右衛門は罷残り度申すに任せ、殘置、去年十月同所出

帆當正月二日、洋中より琉球國を見掛け、傳馬相卸候處、風波強著船難相成、翌日上陸致本船は直ちに戌亥へ乗行候段申出候、尤も本船にて連れ渡り候者は可相斷儀に候得共、傳馬にて上陸候に付致方無之、宗門之儀相糺候處、邪宗等不相學候段申出候に付、人家明置介抱し、此度送越候に付、尙又於當地相尋候處、前條之通孰茂不審の廉無之、依て警固之者相添可送、出旨長崎奉行へ委曲申達候、此段及御届候以上

九月十一日(嘉永四年)

藩主は島津齊彬なり、其届書の缺點なく冥冥の中、萬次郎を愛護するの状見るへし、齊彬一日萬次郎等を引見し、厚き待遇を爲せし後、餘人を退け、米國の政教風俗を問へり、萬次郎は久しく米國風の慣習教育を受けたれば、王侯貴人の前にも憶する色なく、逐一見聞せし所を述へしに、齊彬は彼等に衣服を賜ひて其雄志を賞したり、九月十六日、鹿兒嶋出立廿九日、長崎著港、十月朔日上陸、是より時の長崎奉行牧志摩守の下に、漂泊中の糺問を受くること前後十八回、彼等が長崎奉行より土州藩の漂流人受取役堀部左助に引渡されしは、翌嘉永五年六月中旬なりし、嗚呼當時の漂流

者たる者何ぞ不幸の甚しきや、彼等は琉球に上陸してより、土佐藩に引渡さるるまで實に一年有半を費せり、此長日月の間漂流者自身の不便不幸は勿論、幕府及其關係諸藩に於ても、之れが爲めに少からざる手数を爲さざるを得ず、封建の末路俗吏が無用の手数に、有用の時日と費用とを消費せる一斑推して知るべし

六月廿五日萬次郎等は、土佐の役人に引取られて長崎を發し、同月晦日高知の城下に著し、夫より日日役所に出頭して外國の見聞談を爲し、嘉永五年十月漸く故郷中の濱に歸著せり、彼郷里を出でしより此に十二年、今は二十五歳の倔强なる青年となれり

萬次郎の母は一別十餘年一回の消息なければ、倅は海中に死せしものと思ひ、彼が門出の日を命日となし、粗造ながらも石碑を建てて年忌年忌を祭り、十三回忌も程遠からぬと只管身の不幸を哀み居たりしに、今は我子の恙なきのみならず偉丈夫となりて歸り來りしことなれば、先きの悲歎に引變へ、其喜は口にも筆にも盡すべきにあらず、萬次郎家に入り母子相會するや、感極りて言語も出でず、母子相抱きて歡喜の涙に咽ひたりと

ペルリの黒船浦賀に入港せしは、嘉永六年六月にして萬次郎歸郷の一年後なり、日本は當時對外政策の爲めに、人心恟恟たりし頃なれば、土州藩は直ちに彼を擢て士班に列せしめ、之れに祿若干を與へたり、十二年前蝸牛殼大の漁戸に生れし貧子弟今は一躍士班に列せらる、若し日本にして當時尙ほ桃源仙居の國ならんには、萬次郎等の歸郷上陸も禁止せられしなるべきに、時勢は彼を罪人視せざるのみならず、身は一躍して士班に入り、十餘年饑寒を忍びたる老嫗の門、今は名譽の花を翳せり持つべき者は子なる哉

嘉永六年六月、ペルリ提督の帥ゆる黒船浦賀に入港す、此時邦人中米國の事情を知る者萬次郎に如く者なし、幕府は海外旅行を爲せし科として一旦彼を土州領内に住居するを禁せしにも拘はらず、萬次郎を徵して急に普請役格に任し、高二十俵二人扶持を給し、代官江川太郎左衛門の手に屬せしめ航海、測量、造船掛とせり、同年五月閣老阿部伊勢守の發したる命令書に曰く

異船端艇の儀は、當時松平土佐守小人中濱萬次郎儀、異國より送り越候節、乘参り候船長崎表より取り寄せ候間、右船形に倣ひ、製造候様可被取計候



彼が百金を投じて購入したる、小艇冒険號今は日本造艇の模範と命せらる萬次郎の得意知るべし

安政六年幕府は國使を米國に派遣するの舉あり、乃ち正使は新見豊前守、副使村垣淡路守、監察小栗豊後守等にして、使節は米國船に乗り、其護衛艦たる成臨丸乗組員は木村攝津守、小栗豊後守、勝麟太郎等なり、萬次郎は福澤諭吉と共に通譯として之れに乘組みたれども、福澤は蘭學出身の人にして、當時は英語の譯官としては不適任なりしこと、福澤自身が其自傳中に明記したる程なれば、英語の通譯は主として萬次郎其任に當りしこと知るべし、安政六年の末彼は譯官として成臨丸乗組を命せられ、其翌萬延元年正月品川灣を解纜して米國に行き、同年五月歸朝せり、彼は公務の餘暇に、有志者を集め英語の教授を爲せり、細川潤次郎、榎本武揚、箕作麟祥、大島圭介等の英語は皆萬次郎に學びしなりと

元治元年十月、幕府の軍艦壹番丸は、薩摩藩よりの依頼に依り、三箇月間同藩へ貸與することとなり、萬次郎も次て鹿兒嶋に下り、軍艦運用術と英語を教授し、慶應三年十二月江戸に歸り、明治元年高知藩に召されて、新地百石を給せられ、同年又召され

て開成學校博士六等出仕となり、翌年病を以て職を辭し、土州藩下屋敷に歸りて靜養せり

明治三年九月彼は大山巖、林有造等七人と共に、普佛の戰爭實地視察を命せられ、歐洲に行きしも不幸にして途中病を發し、英京倫敦に滞在して戰地に赴かず、翌年歸朝の途次合衆國マサチューセッツ州の恩人ホワイトフィールドを其居宅に訪ひ、家族等にも逢ひて懷舊の涙を澀ぎ、歸路又布哇にも寄港して故舊を訪ひ、日本の現狀を語りて相別れたり、明治五年大患に罹りしより、専ら療養を事とし、復た世事に關せず、兒孫の教養を樂とし、閑日月を送りしが、同三十一年十一月十二日齡七十二にして歿す、彼の長男は博士中濱東一郎にして、本邦杏林社會中屈指の人物となり、次男は同姓西次郎、工學士、三男同姓慶三郎、海軍大主計、四男同姓信好は商船學校を卒業し、南洋航海中病死し、其他二女あり、何れも貞淑の名ありと云ふ、本邦冒険の士多きも彼の如く寒苦に起りて幸福を得、鄙賤より出て名譽の地に上り、以て維新の文明を裨補したる者なからん

○増田甲齋 國境の比較的接近するが爲め、本邦人にして露領に漂著し、土人に殺

害せられ、或は其地の住民となりし者少からず、然れども鎖港の禁令嚴なるが爲め、歸國するを得ざるは勿論、信書の交通杜絶の時代なれば、素より其事跡を知るに由なし、増田甲齋の如きは昭代の氣運に遇ふて、稀有の生涯を送りしものなり。甲齋は遠州掛川の士、初め立花象藏と呼びたり、彼は砲術を能くし、任侠を尊び、到底無事閑散の間に人生五十の生涯を送り難き人物なり、彼は如何なる故ありてか少壯にして剃髮し、日蓮宗の僧となり、昇進して池上本門寺の執事となれり、嘉永三年露國の軍艦伊豆に來るや、彼奮然緇衣を脱して之れに赴き、私かに船長に請ふて同國に渡り露語を修め、傍ら日本語の教授を爲し、日本語學校を設立す、當時鎖國令尙嚴重なりしかば、已を得ず露國に歸化し、名をヤマトオ(大和夫)と云ひ、已にして露廷に召されアレキサンドル二世に仕へ、歴進して外務官となり、素堂(スエダ)備(ヒツ)叔(シツ)王(オウ)武(ブ)第三等勳章を授けらる。

明治六年、岩倉全權大使露京に至りし時、彼は大使に面會し、懇懇説論を受け、終に歸朝することとなる、彼其官を辭するや、露帝も深く彼の勤勞を賞し、與ふるに年、金三百ルーブル(約三百圓)と旅費七百ルーブルを賜給せらる、歸朝の後、姓名を改めて増

田甲齋と稱し、門を鎖して世人と交際せず、悠悠老を養ひ、明治十八年五月病を以て歿す、年六十五。

### 横濱の功勞者

荊部悅甫

○荊部悅甫(故) 寛政五年保土ヶ谷に生る、世世清兵衛と稱し、名主、問屋、本陣を勤む、先代の時より永代苗字を免され、東海道品川より小田原に至る、各驛取締を命ぜらる、嘉永六年保土ヶ谷驛新川開鑿を企て、工成る横濱開港の際、同港惣年寄を申付られ、文久元年十二月歿す、在世中貿易歩合金を徴收して町費を補ひ、蓄積法を發案して、後年横濱に巨額の財産を作りたるが如きは、事蹟の最も著大なるものとす、其子悦巽亦慶應二年横濱惣年寄を申付られ、同年使部准席申付られ、且帶刀を許さる、明治四年戸籍法改正に付、横濱町第一第二區の戸長と成り、同年區畫改正に付、横濱市長と成り、同六年辭職せり、後横濱共葬墓地取扱役申付られ、十九年横濱市久保山墓地火葬場管理人に擧られ、同年歿す。

石川徳右衛門

○石川徳右衛門(故) 文祿四年の細張水帳に、横濱村十有三戸とあり、其筆頭に掲げ

附録 横濱の功勞者

られたる又四郎は、石川家の祖にして、故先代徳右衛門は十一世の末裔なりと云ふ此間世世一村の長たりしか如し、彼れ文化元年に生れ、安政の初年米使横濱來著の際、里正の職に在りて、應接所建築、糧餉設備等の事を掌り、同五年露艦入津に際して、附近取締を命せられ、其都度若干の賞銀を受領し、開港の事定まるや、惣町年寄に擢られ、三世苗字帯刀を免さる、爾來同役刈部清兵衛と相携へて、横濱市政の改善を圖り、退隱の後は、神佛崇信と、貧民振恤に餘命を委ね、明治二十二年歿す、嗣子仲吉家を繼ぎ、襲名す、後神奈川縣會議員、横濱市會議員、同市參事會員等諸多の名譽職に歴任し、竝に横濱實業銀行、横濱生命保險、日本安全油、横濱船渠、横濱鐵道、横濱倉庫、關東煉瓦等諸會社の重役に推され、又横濱商業會議所議員に選ばる。

## 金指六左衛門

○金指六左衛門故 文政七年小田原町に生る、始め萬次郎と稱し、後父の名を襲ぎ六左衛門と改む、安政年間横濱に來り、雜貨貿易を開始す、後横濱本町の名主に選ばる、嘗て横濱水道埋設の際、數多の人骨出でたるを見て、私資を捐て之れを元町増徳院墓地に埋葬し、塔を建て、法會を設けたり、明治元年名主を廢せらるるや、更に横濱船舶改所に出任し、同五年に歿す。

## 原善三郎

○原善三郎故 文政十年武藏國に生る、安政六年以來、屑絲及び提絲を携へて横濱に往來し、其年店舖を辨天通三丁目に設け、慶應元年の頃に及び横濱隨一の生絲賣込問屋と成れり、明治元年洋銀現場取引所設立を企て、通商司爲替方及貿易商社頭取と爲り、六年生絲改會所及第二國立銀行頭取に、七年第一大區議員に、十三年横濱商法會議所頭取に、十九年横濱蠶絲業組合事務頭取に、二十二年海防費を獻納し、金製黃綬褒賞を下賜せられ、同月正六位に叙せられ、同年横濱市會議員となり、議長に推薦せらる、同年十二月名譽職横濱市參事會員に選ばれ、次て衆議院議員となり、二十七年横濱市蠶絲外四品取引所理事に推され、二十八年十月横濱商業會議所會頭の職に就き、同年貴族院多額納稅議員に互選せられ、同三十年勳四等瑞寶章を賜はり、三十二年六月特に從五位に叙せられ、同月歿す、繼嗣富太郎三十二年先代の業を繼ぎ、一家の組織を合名會社に改め、生絲賣込業の外輸出部を開設し、生絲相織物を海外に直輸し、現に米、佛、露の三國に支店を有せり、三十五年東京三井家の有たりし群馬縣富岡製絲所、栃木縣大崎製絲所、愛知縣名古屋製絲所を譲り受け、先代の創設したる、埼玉縣渡瀬製絲所との四大工場を經營し、年産額三千五百有餘箇に及ぶ、同

年一月第二銀行頭取に選ばれ、次て横濱市参事會員、横濱商業會議所議員となり、三十七八年戦役の功勞に依り、勳四等瑞寶章を賜はる。

茂木保平

○茂木保平(故) 文政十年上野國高崎に生る、幼名を惣次郎と呼び、後惣兵衛と改め晩年に及びて更に保平と改む、安政六年幕府横濱を開港するや、來りて生絲貿易の業を營み野澤屋を起す、明治七年第二國立銀行創立せらるるや、之れが副頭取と成り又同年横濱株式取引所の設立せらるるに當り、副頭取の職に就き、後爲換會社の起るに及んで副社長に推さる、十四年第七十四國立銀行の事務を整理せんが爲め、自から頭取の任に當り、刷新する所あり、二十二年正六位に叙し、金製藍授褒章を下賜せらる、二十七年歿す、二十九年後繼者茂木惣兵衛、茂木保平野澤屋を改めて合名會社茂木商店を置き、又別に同年合名會社茂木銀行を設立す、三十年野澤屋輸出店を設立し、紐育、里昂に支店を置き、羽二重直輸出の業を營む、三十六年野澤屋絹商店を設立し、専ら外人向絹物其他雜貨類を販賣し又參河、武藏、上野等に工場を置き生絲の製造を營めり。

鈴木利貞

○鈴木利貞(故) 文政十年神奈川宿に生る、萬延元年名主役と爲り、引續き戸長の職

に就き、明治の初年青木町地先海面一萬二千餘坪を埋め立てたるは、今の瀧下、宮洲の地にして商家櫛比の市街なり、東海道鐵道敷設の始敷地買上げに、苦情百出せし時彼は政府と地主との間に立て、調和の効を奏し、二十二年神奈川町長に推され、三十九年三月死歿の日に至るまで其職に任じ、四十五年間一日として町の長たらざるなく其他教育衛生、軍事等一町に關する事業は、公私の別なく之れに關係し、殊に日露交戦當時の如きは七十八歳の老軀を驅て、晝夜後援事業に従事せり、二十六年藍授褒章を賜ふ。

石川半右衛門

○石川半右衛門(故) 先代石川徳右衛門の弟にして其分家たり、安政の初年米使横濱に來るや、名主見習の職に在りて、兄を輔け應接所設置其他の任に當り、同五年の露使來朝に際しても幹旋功あり、閑老より金若干の賞を受く、同六年横濱開港と成るや、當時里正の職にありて地區を整理し、市街築造に功ありしかば、官二代苗字を免るして其功を賞す、尋で外國居留地取締に任せられ、五箇村の戸長を兼ね、明治十四年七月歿す、嗣子茂市は現代の半右衛門にして、襲名後縣會議員其他名譽の職に就き、現に横濱實業銀行を始め諸多の會社に重役たり。

高島嘉右衛門

○高島嘉右衛門 天保三年江戸に生る、父を嘉兵衛と云ふ、中年江戸に來り、材木商並建築請負を以て業となし、後南部家に仕へ、進んで同藩勘定奉行と成る、嘉右衛門横濱開港の際商店を横濱本町四丁目に設け、明治三年政府鐵道創業の際横濱石崎より神奈川に至る海面を埋築し、鐵道敷地及國道を官に獻す、今の高島町是なり、又同年伊勢山下に私學校を設け、子弟七百人を養成し藍謝堂と稱す、教師には歐米人を雇ひ入れ、邦人としては福澤諭吉之を助く、四年獨逸飛脚船を購入し、高島丸と命名し、函館横濱間の定期航海を開く、同年瓦斯燈事業を起し、七年三月工事竣るに及で天皇、皇后兩陛下瓦斯局臨幸あり、嘉右衛門叡威の勅語を拜す、是を我國瓦斯燈の創始と爲す、二十五年北海道炭礦鐵道會社長となり、東京市街鐵道會社長等を兼務せり、中年の頃より占易に志し、門弟多く著書亦少からず、從五位勳四等に叙せらる

○田中平八(故) 天保五年信濃國に生れ、中年の頃より諸國を周遊し、遂に横濱に來り、生絲製茶等の貿易を開始し、家號を絲屋と稱す、慶應三年横濱稅關の收稅、貿易額に比して少額なるは、外商等の逋稅に起因するを看破し、鈴木安兵衛と共同し、輸入商品原價を偽るものと認定せば、其商品を買上げ之れが賣捌方は、兩人負擔するの

田中平八

方法を政府に建言し實行しければ、外商等大に驚き、始て貨物の實價を申告する事と爲り、爾來政府は四倍の輸入稅を得たりと云ふ、明治元年洋銀現場取引所を設け自ら所長と爲り、通商司貿易商社及爲換會社の設立せらるるに及んで、爲換會社の貸付掛を命せらる、四年横濱に生絲會社を創立し、十年第一大區議員となり、東京に米商會社を創立し、十六年春病を養はんとして、熱海溫泉に滯在中私財を投じて、同地に水道を設け、電信線を架し、同年田中銀行を設立し、十七年六月歿す、後友人等東京向島梅若祠畔に碑を建て記念としたり、長男洋之助遺業を繼承す、現代田中平八是なり、彼は明治十六年以來、東京横濱間に於て生絲賣込商並銀行業を經營し、同二十年商業視察の爲め歐米諸國を巡歴し、同年田中銀行並に第百十二銀行頭取に就任せり

木村利右衛門

○木村利右衛門 天保五年上總國に生る、横濱移住の後、明治十年歩合金取立掛を命せられしを始めとし、從事したる主なるものは、十一年第一大區議員に、十二年神奈川縣會議員に、十三年正金銀行取締役に、十四年神奈川縣常置委員に、十七年横濱聯合町會議員に選ばれ、廿年勅定黃綬章を賜はり、二十二年横濱市會議員に、同年

市參事會員に、二十五年横濱共同電燈會社社長に、二十六年株式取引所理事長に同年電線製造會社社長に、二十八年東京瓦斯紡績會社取締役、三十年横濱貿易倉庫會社長に選ばれ、三十五年貴族院議員に任せられ、横濱商業會議所創立以來其常務委員たり

増田嘉兵衛

○増田嘉兵衛 天保六年伊賀國に生れ、安政六年海產物商榷並屋庄兵衛支店支配人として横濱に來住し、文久二年獨立して増田屋商店を開き海產物、金巾等の引取業を營み、後専ら砂糖貿易に従事す、明治二年原善三郎等と協力して通商司附屬の下に爲換會社を創立し、其頭取を申付られ同時に東京商社勤務を命せられ、半官半商の地位に立てり、明治三年官命に依り、伊藤大藏少輔(公爵博文)に隨行し、米國商業視察の爲め渡航し、翌四年一行と共に歸朝す、同年金銀分析所を創立し、原善三郎等と共に金穀取引所を創立す、是れ我國取引所の嚆矢なり、後爲替會社の第二國立銀行となるや、選ばれて取締役となり、現今中央倉庫會社、第二銀行、横濱製糖會社等に重役たり、長男増藏は明治十七年嘉兵衛の業務を繼承して、砂糖、小麥粉等の輸入貿易を營み、傍ら廿三年以來横濱市會議員、神奈川縣會議員、横濱商業會議所常務委員

川田小一郎

に就任し、三十八年川崎町附近に製糖所を設け、且つ清國、濠洲等に對し貿易を營みつつあり

○川田小一郎(故) 天保七年土佐國に生る、明治元年高知藩命を以て伊豫國に出張し、別子銅山の不穩を鎮撫して功あり、二年鑛山事務に従事し、翌三年汽船回漕業の目的を以て、九十九商會を設立し、暹て四年三川商會を起し、岩崎彌太郎三菱會社を起すに會し、三川會社を解きて之に合し、彌太郎を社長とし、爾來従事すること十四年、明治十八年三菱共同運輸の兩會社合併し、日本郵船會社起るに及ぶまで斯業に従事す、二十二年日本銀行總裁を命せられ、二十三年貴族院議員に任せられ、二十八年男爵を授けられ、勳三等に叙せらる、二十九年正四位に叙せられ、同月歿す、在世中横濱共有物事件の大紛擾を解きたる事本編所載の如し

高木久成

○高木久成(故) 萬延元年神奈川奉行支配調役に、慶應三年組頭に明治元年布衣に補せられ、常に横濱詰と成り、王政維新の際は朝命又は幕旨を受け、神奈川置縣に盡力したるの廉を以て、黄金五十兩を朝廷より下賜せられ、累進して明治五年神奈川縣參事に任じ、從六位に叙せられ、六年歿す、其病革るや特に位一級を進められ、織物

金圓の御下賜あり、息可久亦夙に職を神奈川縣に奉し、在職中横濱市助役に選れ、四十年退任す

## 西村勝三

○西村勝三(故) 天保七年江戸に生れ、嘉永三年佐倉藩に仕へ、後砲術助教を命せられ、安政三年日光奉行三好阿波守の同心銃隊を教練するの任に當りしが、四年の頃より耐火煉瓦類似品の製造を試み、爾來身を實業界に投し、横濱開港に際し貿易の實況を視察せんとて來住し、文久二年朱の密賣を爲せる咎に依り、江戸小傳馬町揚屋に投せられ、慶應元年特赦せらる、翌二年再び横濱に來り太田町に住す、當時伊勢勝と稱せしものは是れなり、明治三年軍用靴製造所を東京に設け、五年莫大小製造所を設けたるは、何れも我國に於ける嚆矢にして、後東京商業講習所(東京高等商業學校の前身)の創設に力を盡し、耐火煉瓦工場を起し、櫻組を組織し、東京商業會議所副會頭と成り、府會議員と成り、工業視察の爲歐洲に渡航し、三十三年には綠綬褒章を授與せられ、四十一年一月歿す

## 平沼專藏

○平沼專藏 天保七年武藏國飯能町に生る、横濱に來住せしは、安政六年にして、最初明石屋平藏(今の渡邊福三郎店)の店に入りたるが、當初決心する所あり、蓄財に努

めたる結果、慶應元年には、現今の住所なる横濱本町二丁目の土地を買取し、羅紗、唐棧等の引取竝に生絲の賣込業を開始するに至れり、彼が赤手にして富豪となりし原因の一二を舉れば、曾て米國より輸入せる綿絲を買占めたるに、程なく南北戦争起りて、同國よりの入荷絶え、内地棉花の凶歉と相待て、相場騰昂し、忽ちにして數十萬圓の利益を收むることを得たり、又明治元年は前年米穀の凶作に依りて、南京米を輸入するもの多く、横濱市場在荷山を爲し、外國商館は投げ賣の舉に出むとするに際し、安價を以て五百萬斤を買收し、當時小賣相場一圓に付七升替なりしを、同一斗三升替にて盛んに賣出したれば、近在數里に涉りたる貧民は、潮の如く集ひ來り數日にして賣盡し、爲に俠名を傳り、同時に巨利に潤ひたりといふ、爾來商略著著圖に當り、蓄積漸く嵩むに至り、私立銀行を設立したるは今の横濱銀行なり、又彼れが老後の餘榮として、設けたるは平沼小學校(本編教育の部に詳かなり)なり、又公生涯としては、明治十年二月、歩合金取締役に選任せられたるを始とし、第一大區議員、神奈川縣會議員、横濱市會議員、同市參事會員、同水道局長、貴族院議員等に舉られ、横濱米穀株式取引所、電線製造、東京瓦斯紡績、横濱共同電燈、其他數多の會社に重役たる

の外に、諸多の銀行業に關係し、又曾て海防費を献納して従五位に叙せられ、三十七八年戦役の功勞に依り、勳五等に叙せらる。

伏島近藏

○伏島近藏(故) 天保八年上野國に生れ、慶應元年横濱市に移住して、羅紗、蠶卵紙、製茶、漆器、海産物等の貿易に従事し、明治十一年第七十四國立銀行を起して之れが頭取たり、十三年蠶卵紙十一萬枚を携へて、伊太利に渡航せしに、同地商人は蠶兒の將に發生せんとするの期迫るを待ち、不當の安價を以て買取らんとせしも、彼自から主張せる直段を維持して一步も譲らず、遂に八十餘萬枚に蠶兒を發生せしめ爲に價を負ふ事五十一萬圓に及びしも數年の後完済せりと云ふ、二十七年八萬圓を費して新吉田川を鑿ち三十一年には、新富士川を開鑿し(本編運輸の部にあり)其間架橋十一内六は獨力之れを築造したるなり、其他上州なる郷里の爲に盡す事多かりければ、九年聖駕東巡の際賞賜あり、後三十二年横濱市參事會員に擧られ、横濱市瓦斯局長に推され、三十四年伯爵板垣退助等と共に出願せる北海道宗谷郡官林開墾の許可を得、栗原亮一西山志澄等を伴ひ該地へ出發し同地の客舎に歿す。

大谷幸兵衛

○大谷幸兵衛 天保八年伊勢國に生れ、横濱市に來り、製茶及海産乾物賣込業を營

み後、大谷嘉兵衛商店に營業を移して合併す、其間横濱商業會議所議員、武藏商業銀行並に同貯蓄銀行の専務取締役及び共慶生命保險株式會社専務取締役に就任し、其他商事諸會社の重役を兼ね。

朝田又七

○朝田又七 天保九年三河國に生れ、文久元年横濱に來住し、同漕業を營み今日に至る、其間數十年横濱市に於ける公共の事業にして、彼れの關係せる主なるものを擧げんに、明治十一年、神奈川縣第一大區區會議員に當選せしを始めとし、十二年以後神奈川縣會議員、同常置委員、同市部會議長、同縣參事會員、横濱市會議長、同市參事會員、同水道局長、同商業會議所常務委員、貴族院議員等に擧げられ、明治二十年海防費獻納の賞として勅定黃綬褒章を又三十七八年事件の功に依り、勳四等旭日小綬章を授與せらる、其他實業方面に於ける現職は、横濱船渠、横濱鐵道、明治火災、同生命保險、第二銀行、横濱實業銀行、横濱實業貯蓄銀行、日本製氷、日本ベイント製造、日本安全油、東明火災、海上保險の會社等を始めとし、諸多の會社銀行に重役の地位を占め、諸團體より推されて其長たるもの多し。

平沼九兵衛

○平沼九兵衛(故) 五代目九兵衛天保十年、面積十餘萬坪の海面を埋め立てて新田



を開けり、今の平沼町の一部及西平沼是れなり、其兒六代九兵衛は弘化元年保土ヶ谷に生れ、文久三年平沼新田に移轉し、新田開發に従事し、傍ら製鹽事業を營み、同地方名主に推さる、明治十七年新に新田を開き、後之れを宅地と爲せり、即ち平沼町三四丁目なり、戸塚、程ヶ谷間の國道の如きも、亦彼の獻策經營に成れるものなり、縣那市會の議員等に擧られ、四十年三月歿す、嗣子亮三は慶應義塾に業を卒へ、九兵衛死後市會議員に擧らる

加藤八郎右衛門

○加藤八郎右衛門(故) 明治二十一年、町村制實施以來、神奈川町會議員に選ばれ、二十九年神奈川銀行を發起し、爾來其取締役頭取たり、三十四年横濱商業會議所議員に選ばれ、三十八年に歿す

宮川香山

○宮川香山 其祖先は近江國淺井家の末裔にして、祐閑齋と號し、現代香山の父宮川長造に至るまで十代、世世陶器製造を以て業とせり、長造は時の名工木米の門に入りて技を研ぎ、特に宮中より京都眞葛原に本窯を築くを許され、安井宮より眞葛焼の稱を賜はり、華頂宮より香山の號を拜領し、安政六年長造歿して後、現代香山其業を繼ぎたり、時に年僅に十二、爾來和漢陶磁器製法を研究し、晝は大雅堂を師とせ

り而して彼は陶磁器の輸出業を開かんと志望を懷き、横濱港に來りて製造所を設けしは明治二年にして、九年米國費府萬國大博覽會に其製品を出品し、賞讃を博したるを第一とし、内外國の博覽會又は共進會に出品して賞を受けたる事五十有餘回、長子を歐米に派して陶業を視察研究せしむる事數回、十四年綠綬章を受け、三十年帝室技藝員を命せらる

安西德兵衛

○安西德兵衛 天保十年岩代國に生れ、明治三年舊小野組に入り、東京築地新榮町の製絲場に於て、製絲の業に従ふ、六年小野組及郷友有志と共に、二本松製絲工場を創設せり、八年小野組解散し、彼が横濱に獨立開店したるは、十八年七月に在り、又羽二重組合の役員に列し、内國勸業博覽會には、屢、審査官を命せられ、横濱市會議員、同商業會議所議員等に擧らる

箕輪三郎

○箕輪三郎(故) 天保十一年江戸に生る、明治六年神奈川縣廳より學區取締を命せられ、爾來數年間戸長職を勤め、十一年久良岐郡長に任せられ、十六年横濱區長と成り、十九年久良岐郡長の職に復し、二十九年勳六等を授けられ、三十三年依願免官と成り、正六位に叙せらる、四十一年五月歿す

箕田長二郎

○箕田長二郎(故) 天保十一年江戸に生る、安政六年横濱に來住し古銅漆器の商店を開きたり、時に世上漸く穩かならず、美術工藝品の如き棄て顧みるものなきに至りたれば、畫工、冶工、彫刻師の如き糊口に究するの徒を誘て銅器漆器の佳品を製造せしめ、海外に輸出したり、明治五年澳國大博覽會御用達を命せられ、次で米、佛、獨の大博覽會に出品委託を受け、若くは出品して金、銀、銅諸種の賞牌を受け、縣市會議員に選ばれ、七十四銀行副頭取に推され、又海防費献納の爲め從六位に叙せらる

高木三郎

○高木三郎(故) 天保十二年山形に生れ、慶應三年米國に留學し、明治四年在米國華盛頓日本公使館書記生に採用せられ、六年臨時代理公使と爲り、七年より十三年に至るまで、領事として同國に在勤し、十三年退職し、同伸會社を設立して取締副頭取に推され、後社長に推され、二十九年には生絲検査所商議員を命せられ、三十六年横濱商業會議所特別議員に擧がる、又製絲業に關し三日月ハカリと稱する秤量器の如き揚卷器械節コギ器械の如き、又其運送に用ふる荷箱の如き、孰れも彼の案に依て改良せられたるものなり、四十二年三月歿す

堤磯右衛門

○堤磯右衛門(故) 天保十四年、神奈川縣久良岐郡に生る、明治六年洗濯用石鹼を製

造し、一箇金拾錢にて販賣せり、是實に我國石鹼製造の嚆矢なり、七年初めて化粧用石鹼の製造を試み、且附屬事業として香水及髮洗粉をも製造せり、爾來事業進歩し二十六年まで引續き製造に従事し、其間屢博覽會へ出品し、十年京都博覽會に於て有功賞銅牌を得たるを初とし、賞を受くる事凡十回、又二十三年中時事新報社に於て、最良なる石鹼の投票を公衆に求め、其結果大多數にて當選し、同社より金牌の贈與を受け、事業益盛大ならんとするに際し、二十四年一月歿す

大谷嘉兵衛

○大谷嘉兵衛 弘化元年伊勢國に生る、文久二年横濱に出て輸出業に従事せしが、爾來製茶貿易の隆盛に赴くと同時に、租製濫造の弊起り、海外需用者の信用を失墜せんとするや、屢、産茶地を歴訪して、製茶の改良を促がし、茶業組合を組織し、直輸の途を開き、三十一年米、西戦争の結果、米國が製茶に苛重なる輸入税を課するや、彼は米國に航し、時の大統領マッキンレーを始め、朝野の有力者を説て廢税を促がし、翌年歸朝せり、此行に際し東京、横濱兩商業會議所の代表者として、費府萬國商業者大會に參列し、日、米直通大平洋海底電線速成の事を提議して、其の目的を達したり、彼は貿易事業の餘力を國民教育及獎兵事業に傾注し、又博覽會共進會等の開設ある

に際し、評議員、審査官等に任せられたること多し、現に帶る公私職務の重なるものは、貴族院議員、横濱水道局長、横濱市參事會員、横濱商業會議所議員、七十四銀行及横濱貯蓄銀行頭取、横濱獎兵義會長、横濱市教育會長、茶業組合中央會議議長、横濱銀行俱樂部長等なり、功勞に依り從四位勳三等に叙せらる。

中山沖右衛門

○中山沖右衛門 代代横濱に農商を營み、明治二年政府より、兩替渡世を命せられ中屋なる屋號を賜りたり、明治初年横濱水道發起人と爲り、後第七十四國立銀行を起し、神奈川縣會議員、横濱市會議員、同名譽職市參事會員となり、元町貯蓄銀行を創設したるを以て、其事業の主なるものとす。

小野光景

○小野光景 父小野兵助は文政元年信濃國に生れ、安政六年横濱に來住し、本町五丁目町役と成りしを始めとし、元治元年以來明治初年に至る迄、横濱諸町の名主を勤め、其間慶應三年征長軍費として幕府へ獻金したる廉に依り銀若干を賜はり、一代苗字を名乗るべき沙汰あり、次で勤務出精の廉を以て、使部准席に列せられ、帶刀を免るさる、同四年使部准席の稱廢せられて後は、官員詰所へ罷出る儀は、身分一等進みたる儀と心得べしと達せられ、同年名主の名義一般廢せられてより、更に市長

を命せらる、翌五年疾を以て職を辭し、郷里に退隱し、明治三十三年七月歿す、其子光景は弘化二年信濃國に生る、明治の初年より教育の普及就中横濱商業學校設立に力を致したるが如き、貿易商總理として、又は個人として埠堤の改築、船渠商品陳列所、貿易倉庫、商業會議所等の設立、八王子鐵道の計畫創設等に力を盡し、四十年來壓迫を蒙りし、外商の專横を制して、吾生絲商の商權を恢復し力るが如き、近くは横濱築港工事の斷絶せんとするを見て、政府議會の間に斡旋して、其繼續を實行せしめたるが如きは、其主なるものにして、明治初年以來學區取締、戸長、第一大區會議長、神奈川縣會常置委員、横濱市會議員、同名譽職參事會員、横濱正金銀行頭取、横濱商業會議所會頭等に就職す。

戸塚千太郎

○戸塚千太郎故 弘化四年江戸に生れ、明治四十年歿す、横濱商業銀行、横濱貿易倉庫等の重役、横濱商業會議所常務委員、横濱商業學校常務議員等は、彼が死亡の時就任中にてありし。

安部幸兵衛

○安部幸兵衛 弘化四年越中國に生る、父を長兵衛と稱し、弘化三年江戸小舟町に店舗を開き、今に至り三代を経たり、幸兵衛幼よりして、江戸堀江町板並屋庄兵衛に

仕へ安政六年横濱開港の時主人横濱に來り商店を設く幸兵衛之れに従ふ、明治七年獨立して、市内本町四丁目に砂糖、麥粉、石油、外米の引取業を開き、十七年更に南仲通三丁目に移り、爾來今日に至れり、二十二年横濱市會議員に、二十八年横濱商業會議所議員となり、次で常務委員に就任せり、又横濱舶來砂糖貿易商引取組合の成るや頭取に推され、横濱砂糖貿易商組合と改稱するに至り、續いて其任に當り、近くは増田増藏等と共に川崎附近に横濱精糖會社を起して其重役たり

後藤省三郎

○後藤省三郎(故) 七寶燒の創業地たる愛知縣海東郡某村の出生なり、明治六年舉家横濱に轉じ、七寶工場を設け十年に及び、外人の嗜好に適合する、一種の製品を製作し得るの機に達し、同年開設の内國勸業博覽會に出品して始めて賞牌を受け、爾後漸次海外に於ける需要を喚起し、其後製品を濠洲アデレート博覽會に出品して各一等賞を得、越えて第三内國勸業博覽會、米國シカゴ世界博覽會、第五回内國勸業博覽會並に米國セントルイ萬國博覽會等に出品して、第一等賞或は進歩賞を受領する等、事業大に進み、職工を雇使すること三百名の多きに上りしことあり、明治十六七年至り、粗製濫造の弊起り、爲に海外に於ける本邦製品の信用を失墜し、延て

太田治兵衛

の後事業に一大打撃を蒙りしが、十八年に至り他工場に於て模倣し能はざる、一種獨特の技を發明し、漸く海外に於ける昔日の信用を恢復するを得、爾來盛況を告げ、其七寶燒は本港輸出重要品の之一に數へらるるに至れり、明治三十六年十二月歿す、長女千代野遺業を襲き、職工數十人を役し、製造及輸出入業を營みつつあり

○太田治兵衛 弘化四年江戸荏原郡北品川に生る、太田仁兵衛の長男なり、文久元年家督を相續す、横濱に移住したるは、明治二年十二月にして、質屋及貸倉を業とす、横濱商業會議所議員、同市會議員等は其公職の主なるものとす

佐藤喜左衛門

○佐藤喜左衛門(故) 嘉永元年武藏國久良岐郡北方村に生る、明治十年横濱第一大区三小區戸長となり、十六年横濱區長心得となり、同年久良岐郡長に任せられ、後市町村制實施に當り、横濱市長となり、二十九年滿期退職せり、公職に在ること、前後二十年、三十二年東京移民合資會社の用務を帯びて布哇に渡航し、幾もなく同地瘴疫の侵す所となりて歿す

梅田義信

○梅田義信(故) 嘉永元年江戸に生れ、明治六年鳥取縣十二等出仕となり、爾來東京府東多摩郡長、東京市芝區長、檢事、枋木縣及奈良縣書記官、文部省參事官、同書記官等

に歴任し、二十五年勳六等を授けられ、依願免本官と成り、二十九年六月横濱市長に就任し、在職中三十九年九月歿す、從五位に叙せらる

左右田金作

○左右田金作 嘉永二年上野國に生る、文久三年單身横濱に來住して、身を實業界に投じ、明治元年始めて南仲通に兩換店を設け、二十二年中創立委員と成りて利根運河株式會社を起し、二十八年南仲通に合資會社左右田銀行を、三十三年には別に株式會社左右田貯蓄銀行を設け、自ら頭取と成り、全國要地に支店を置けり、其公生涯としては、明治三十九年貴族院議員に任命せられしまで、神奈川縣會議員、横濱市會議員、横濱商業會議所常務委員等に就職し、三十九年日露戰役當時の功勞に依り勳四等を授けらる

美澤進

○美澤進 嘉永二年備中國に生れ、阪谷朗廬、箕作秋坪等の門に遊ひて、英漢の學を修め、後慶應義塾に業を卒へ、横濱商業學校長に任せられしは、明治十五年なり、爾來商業補習學校、女子商業補習學校等の校長を兼ね、今日に至るまで殆んど三十年商業教育に盡瘁したる事、本編に記する所の如し、而して横濱商業會議所特所議員に舉らるること二回に及べり

島田三郎

○島田三郎 養父豊寛は天保九年江戸に生れ、横濱に來住したるは文久二年なり、爾後久しく名主又は戸長等の職にあり、解職後と雖も一市に關する大小の件は概ね參畫せざるなく、縣會議員其他名譽の職に就く事數回、三十五年七月歿す、三郎は嘉永五年江戸に生る、幼にして昌平學校に入り、後、沼津兵學校に移り、尙横濱其他に於て英、漢の學を修め、明治六年の頃より横濱毎日新聞社に筆を執り、其名を社會に知らるるに至り、八年元老院大書記生に擧げられ、累進して十四年には文部大書記官に任せられたり、同年官を辭し、神奈川縣會議員に選ばれ、尋て同常置委員及議長に推され、二十三年英、米、佛、獨諸國を漫遊す、在官當時の外は毎日新聞と關係を絶ちたる事なく、第一期以來間斷なく横濱市選出衆議院議員に列し、其間全院委員長又は副議長に推されたる事あり

相馬永胤

○相馬永胤 舊彦根藩士族、嘉永三年近江國に生る、年甫て五歳父に従ひ江戸に移り、幼にして讀書劍槍を好み、明治戊辰の變に際し、東征の軍に従ひ各地に轉戰す、平定後、藩地に歸り、其の後東京に出て、安井息軒の門に入り、研鑽數年、明治四年米國コロンビア大學に入り、法律を學び、卒業の後、パチエロー、オヴ、ローの學位を受け、更に

ニール大學に入り、法律及び經濟學を専攻し、在米九星霜十二年歸朝して元老院に入り、後司法省附屬代言人となり、次で十四年判事に任せられしも、翌年職を辭して横濱正金銀行の取締役となり、三十年同行頭取となり、今尙ほ取締役にして會て横濱商業會議所常務委員に推さる、又會て同志と共に東京專修學校を創立し、現に其校長たり、三十三年日清事變に於ける功に依り從五位に叙せられ、三十五年北清事變の功に依り勳五等瑞寶章を、三十九年日露事件に於ける功に依り、勳三等旭日中綬章を賜はる

海老塚四郎兵衛

○海老塚四郎兵衛 先代海老塚四郎兵衛は、嘉永五年横濱に生れ、明治十二年伊勢町外四箇所の戸長を命せられ、十五年神奈川縣會議員に、三十年市會議員に擧げらる、營業は漆器賣込商にして、會て防水布を發明して、專賣特許を得、三十五年海老塚合名會社を組織し、三十八年退隱す、現代四郎兵衛は明治十五年の出生にして、慶應義塾に學業を修め、父四郎兵衛退隱後其業を繼ぎて、防水布製造に従事せり

田中茂

○田中茂 嘉永五年江戸に生る、明治十二年横濱市に銅、鐵、鉛機械店を開き、二十八年より海外直輸出入を開始せり、横濱市會議員、横濱商業會議所議員等に擧げられ

横須賀商業銀行等に重役たり

田沼太右衛門

○田沼太右衛門 嘉永六年武州北葛飾郡に生る、明治十年神奈川縣第一大區議員に選ばれしより以來、横濱市會議員、神奈川縣會議員、横濱商業會議所議員等に當選したり、其他大日本圖書、横濱共同電燈、横濱電氣鐵道等の諸會社、横濱米穀取引所、横濱貿易銀行等の重役を勤め、傍ら女子教育に盡瘁しつゝあり

高橋是清

○高橋是清 安政元年仙臺に生れ、慶應元年同藩藩費を以て横濱に英語を修め、次で同藩より北米留學を命せられ、歸朝後開成學校に入學し、大得業生と成りて後、同校少教授に任せられ、爾來諸省に奉職し、十八年農商務省專賣特許局長と成り、專賣商標保護に關する現狀實視の爲め、歐米各國に差遣せられ、歸朝後東京農林學校長に兼任せられ、二十二年日、秘露鑛業會社全權委員と成りて秘露に渡航し、二十五年六月官を辭し、從四位に叙せらる、爾後身を實業界に投じ、日本銀行支配役、西部支店長と成り、次いで横濱正金銀行頭取に選任せられ、三十三年日本銀行副總裁仰付られ、三十八年政府の内命に依り英、米兩國に渡航し、英國に於て外債募集に力を致し、同年貴族院議員に任せられ、三十九年横濱正金銀行頭取となり、同年帝國日本政

府特派財政委員として英國に行き英貨公債の募集に成功し、同年勳一等瑞寶章を賜り、四十年男爵を授けらる。

金子政吉

○金子政吉 安政元年下野國に生れ、明治十二年金子家に入る、其始め質屋を業とし、廿一年横濱銀貨並株式取引所肝煎に就職したるを始とし、二十三年以來市會議員に三回議長代理者に就任する事、二回商業會議所議員に兩回當選し、其他徴兵參事員、水道常設委員等の職に就き、又横濱商業銀行、同貿易銀行、同蠶絲外四品取引所、同貿易倉庫會社等の重役に擧げらる。

小泉穀右衛門

○小泉穀右衛門 先代穀右衛門は天保五年横濱に生れ、萬延元年より農商の業を營み、明治六年質屋營業を開始し、十八年歿す、現代穀右衛門は他より入りて、小泉家の家督を相續し、父祖傳來の業務を繼續し、神奈川縣會常置委員、横濱商業會議所議員等に擧げられ、戶部貯蓄銀行頭取等を勤む。

渡邊福三郎

○渡邊福三郎 安政二年江戸に生る、祖父渡邊治右衛門磐城國白山水に鑛脈を發見し、爾來巴麻油を製造して販賣し、又軍艦用石炭御用達と爲る、安政六年横濱本町五丁目に石炭納屋を建設し、明石屋平藏の名義を以て開店せり、然れども其主腦は

治右衛門にして、江戸明石屋治右衛門の支店なり、業務の主なるものは、石炭販賣にして、其他蠶絲、海産物等をも扱へり、平藏死去の後店號を明石屋新太郎と改稱し、渡邊吉兵衛の經營に移れり、慶應元年福三郎横濱の店を繼承するに及び、石炭屋福三郎と改稱す、福三郎は明治二十一年、海防費の中へ金一萬圓獻納したるに依り、從六位に叙せられ、二十二年横濱市會議員に、二十三年神奈川縣會議員に當選し、二十六年市會議長に推選せられ、三十七年名譽職市參事會員に選任せられ、同年貴族院議員に就職し、三十九年勳四等を授けらる、現に重役として就職せる會社、銀行は二十七銀行、東京瓦斯會社、横濱鐵道會社外十數社なり。

三橋信方

○三橋信方 明治十二年外務省雇として就職、同十八年より外務省兼神奈川縣奏任御用掛として神奈川縣外務課長を兼ね、十九年同縣書記官に任せられ、後參事官又書記官に任せらる、二十七年國際公法顧問として、日清戰役に從軍し、續て營口民政部長に任せらる、歸朝後外務參事官、書記官、外務大臣秘書官等に任せられ、三十三年辦理公使に昇任し、三十四年一月特命全權公使となり、和蘭國兼丁抹國駐劄仰付られ、三十九年九月歸朝して本官を辭し、横濱市長に就任す、在官中從四位勳三等に

叙せらる

若尾幾造

○若尾幾造 先代幾造は山梨縣に生れ、安政六年より輸出生絲、輸入棉花及砂糖の商業を營み、明治九年横濱本町四丁目に於て、生絲賣込業を開始す、二十九年十月病死す、現代幾造も亦同縣に生れ、始め林平と稱し、父の歿後其名を襲きて幾造と改め横濱市に於て蠶絲貿易商を營む、爾來貴族院議員、横濱市參事會員、同商業會議所常務委員等に擧げられたるを主なるものとし、横濱四品取引所理事長、東洋汽船横濱電燈、横濱電線、日本鐵道、横濱鐵道の諸會社を始め、諸多の會社の重役と爲り、若尾銀行に頭取たり、又縣下藤澤町と、埼玉縣下本庄町の二箇町に生繭乾燥所を設け、鶴沼村字石上に生絲製絲機械場二百人繰を設け、明治村に第二製絲場五十人繰を設く、該所製品は第五回内國勸業博覽會、三十六年佛國萬國博覽會、三十七年米國萬國博覽會に出品し、金牌其他を得、三十九年勳五等に叙せらる

市原盛宏

○市原盛宏 安政五年肥後國に生れ、同藩英學校同志社英學校を経て、米國エール大學に入り、ドクトル、オヴンイロンフイーの學位を受け、其前後同志社又は仙臺なる東華學校に教鞭を取り、二十五年歐洲諸國に漫遊し、歸朝後日本銀行、第一銀行に入り、三十五年澁澤男に従ひて再び歐米に遊び、同年十二月横濱市長に推選せられ、三十九年辭す後再び第一銀行に入り、現に東京本行取締役にして、韓國支店支配人たり

齋藤忠太郎

○齋藤忠太郎 安政六年埼玉縣に生れ、東京に遊學する事數年の後、明治十年横濱に移住す、爾來英漢の學を修むる傍ら、東京鷓鳴社と提携して顯猶社を組織し、民權の鼓吹に努め、同十五年東京專門學校に入りて政治經濟及英學の學科を卒へ、後横濱商法會議所の事務に執掌し、二十二年日本絹綿紡績會社に入りて紛糾を解き、廿九年東京移民會社を起し、爾來布哇へ二萬二千、加奈陀へ千五百、麻尼刺へ千二百の移民を送り、横濱實業銀行創設に力を致し、日本漆器株式會社を起し、現に横濱商業會議所議員、神奈川縣參事會員たり

樋口登久次

○樋口登久次郎 先代登久次郎は天保七年山梨縣山梨郡某村に生れ、明治二年より横濱市に於て和洋酒類販賣業を營み、横濱に爲替會社の設立せらるるに及びて重役に列し、第二銀行に繼承せらるるの後も、依然頭取或は支配人の地位に居り、縣會議員、市參事會員、横濱商業會議所議員等の諸役に選任せらる、現代登久次郎は、安



飯島勇造

政六年山梨に生れ、松本源六と稱し、第二銀行取締役横濱商業會議所議員等に推薦せらる

○飯島勇造故 文久二年甲斐國に生れ、吳服太物商を營みしが、横濱開港の當時自國製生絲竝に蠶種紙を出荷し、外商に販賣し、爾來上、武、信州其他奥羽地方の生絲を買收して、商館に賣込むを常としたり、殊に明治十九年岩代國福島に於て折返生絲多量を買入れ、同仲社の手を経て、直輸出したることあり、明治初年市内中村に有志と共に石造倉庫數棟を建設し、石油火止製造所通廣社と稱し、社長に推薦せられたり、其他従事したりしは横濱市參事會員、貿易商組合總理、貿易倉庫株式會社社長、横濱蠶絲外國品取引所常務取締役等とす、其經營に係る森田屋洋服店は明治六年の

下巻	正誤表
行	正
萬延元年	文久二年
紙同洋	紙同洋
同六	同洋
附録	同四
九九八	九九八
九九九	九九九
二〇〇	二〇〇

第四回内國勸業博覽會第五回内國勸業博覽會に於て各賞を得す  
二年信州松代に生れ、明治八年横濱に來り東京に遊學し、數年を手始として米穀取引仲買店を開き、後日本絹綿紡績會社社長を  
手始として米穀取引仲買店を開き、後日本絹綿紡績會社社長

岡野利兵衛

起して、今尙ほ其重役に列し、又神奈川縣會議員、同縣參事、會員、横濱商業會議所議員、衆議院議員等選ばれ、三十七八年役の功に依り勳四等に叙せらる  
○岡野利兵衛 初代岡野利兵衛は横濱開港に際し、製茶及び海産乾物の輸出業を起し、二代を経て當主利兵衛に及ぶ、當主は明治十七年横濱製茶業組合創立以來副組長に、十九年茶業組合中央會議所設立以來議員に、其他日本貿易協會委員、横濱第七十四銀行横濱貯蓄銀行等の重役に擧げられ、次で横濱商業會議所創立以來議員に選ばれ、三十二年横濱海産乾物同業組合副組長、磐城セメント會社、横濱魚油會社重役等に擧げらる

海老塚徳三郎

○海老塚徳三郎 父海老塚與次右衛門は武州生麥の人なり、安政六年横濱に來住し、本町に運送店を開き、村田屋と稱す、當時運送業は十軒に限定せられ、彼れは其總代たり、明治九年朝田又七等と共に製氷事業を起し、十一年伏島近藏、朝田又七等と共に共益社を起し、白米、醬油、薪炭の販賣社を組織し、其社長と成る、又太田村に溜池を築造し、私設水道を敷設し、横濱港碇泊の内外國船艦へ飲料及汽罐用水を供給せり、十六年六月歿す、現代徳三郎は明治元年横濱に生る、五年分家して、父の遺業を繼

附録 横濱の功勞者

政六年山梨に生れ、松本源六と稱し、第二銀行取締役横濱商業會議所議員等に推薦せらる。

飯島勇造

○飯島勇造(故) 文久二年甲斐國に生れ、吳服太物商を營みしが、横濱開港の當時自國製生絲竝に蠶種紙を出荷し、外商に販賣し、爾來上武、信州其他奥羽地方の生絲を買收して、商館に賣込むを常としたり、殊に明治十九年岩代國福島に於て折返生絲多量を買入れ、同仲社の手を経て、直輸出したることあり、明治初年市内中村に有志と共に石造倉庫數棟を建設し、石油火止製造所通廣社と稱し、社長に推薦せられたり、其他從事したりしは横濱市參事會員、貿易商組合總理、貿易倉庫株式會社社長、横濱蠶絲外四品取引所常務取締役等とす、其經營に係る森田屋洋服店は明治六年の創設にして、製品は第四回内國勸業博覽會第五回内國勸業博覽會に於て各賞を得たり、三十七年三月歿す。

堀谷左治郎

○堀谷左治郎 文久二年信州松代に生れ、明治八年横濱に來り東京に遊學し、數年の後實業界に入りしを手始として米穀取引仲買店を開き、後日本絹綿紡績會社社長と爲り、三十年東京移民會社を起し、數千の移民を布哇に送り、三十一年實業銀行を

起して、今尙ほ其重役に列し、又神奈川縣會議員、同縣參事、會員、横濱商業會議所議員、衆議院議員等に選ばれ、三十七八年役の功に依り勳四等に叙せらる。

岡野利兵衛

○岡野利兵衛 初代岡野利兵衛は横濱開港に際し、製茶及び海産乾物の輸出業を起し、二代を経て當主利兵衛に及ぶ、當主は明治十七年横濱製茶業組合創立以來副組長に、十九年茶業組合中央會議所設立以來議員に、其他日本貿易協會委員、横濱第七十四銀行、横濱貯蓄銀行等の重役に擧げられ、次で横濱商業會議所創立以來議員に選ばれ、三十二年横濱海産乾物同業組合副組長、磐城セメント會社、横濱魚油會社重役等に擧げらる。

海老塚徳三郎

○海老塚徳三郎 父海老塚與次右衛門は武州生麥の人なり、安政六年横濱に來住し、本町に運送店を開き、村田屋と稱す、當時運送業は十軒に限定せられ、彼れは其總代たり、明治九年朝田又七等と共に製氷事業を起し、十一年伏島近藏、朝田又七等と共に共益社を起し、白米醬油、薪炭の販賣社を組織し、其社長と成る、又太田村に溜池を築造し、私設水道を敷設し、横濱港碇泊の内外國船艦へ飲料及汽罐用水を供給せり、十六年六月歿す、現代徳三郎は明治元年横濱に生る、五年分家して、父の遺業を繼

大濱忠三郎

○大濱忠三郎 先代大濱忠三郎は、天保十二年信州に生る、慶應年間横濱に移住し貿易に従事す、明治十一年第一大區複選議員を始とし、横濱市會議員、神奈川縣會議長、名譽職市參事會員、横濱商業會議所議員等に當選し、二十一年勅定の黃綬褒章を下賜せられ、三十九年九月歿す、現代忠三郎は明治四年横濱に生れ、先代の歿するや家督を相續し、南仲通に洋紙織物引取商及東京日本橋區田所町に洋紙織物卸商を營めり、公職としては横濱區會、神奈川縣會に議員となり、横濱市參事會員、同商業會議所常務委員に推され、又横濱蠶絲外四品取引所、横濱倉庫、横濱電氣鐵道、關東煉瓦、横濱生命保險、大日本共同運輸等の諸社に重役たり

渡邊文七

○渡邊文七 明治四年山梨縣南都留郡某村に生れ、小林金太郎と稱せしが、先代文七に養はれ、二十九年家督相續と同時に雙名す、營業は蠶絲屑物貿易商、横濱蠶絲外四品取引仲買にして、横濱市會議員、横濱市參事會員、横濱商業會議所常務委員、帝國肥料、關東煉瓦、横濱生命、横濱電氣鐵道諸會社等に重役たり

石井健吾

○石井健吾 養父石井政兵衛は、兩替商を業とし、明治二十五年五月歿す、健吾は明治七年東京に生れ、二十八年東京高等商業學校を卒業し、直に第一銀行に入り、三十九年石井家に入りて家督を相續し、三十二年第一銀行横濱支店支配人と爲り、三十九年中銀行事務視察の爲、歐米諸國を漫遊せり

附錄終



原 春三 郎



菊 部 悦 甫



茂 木 保 平



石 川 德 右 衛 門



石 川 半 右 衛 門



金 指 六 左 衛 門

橫濱市功勞者



西村勝三



増田嘉兵衛



高島嘉右衛門



平沼海藏



川田小一郎



中田平八



伏島近藏



高木久成



木村利右衛門



其 三 郎



加 藤 八 郎 右 衛 門



大 谷 幸 兵 衛



其 田 長 二 郎



宮 川 香 山



朝 田 又 七



高 木 三 郎



安 西 德 兵 衛



平 沼 九 兵 衛



大田治兵衛



小野光景



堤磯右衛門



佐藤春左衛門



戸塚千太郎



大谷嘉兵衛



梅田義信



安部幸兵衛



中山沖右衛門



田沼太右衛門



相馬永胤



左右田金作



高橋是清



海老塚四郎衛



美澤進



金子政吉



田中茂



島田三郎





橋口金久次郎



若尾幾造



小泉殺右衛門



飯島勇范



市原盛宏



渡邊福三郎



堀谷左治郎



衛藤忠太郎



三橋信方

歷代神奈川縣長官



渡邊 文次郎



岡野 利兵衛



海老塚 徳三郎



大濱 忠三郎



石井 健吾



野村靖



陸奥宗光



東久世通禧



沖守園



大江卓



鍋島貞大



淺田德則



中島信行



寺島宗則



中山 誠治



内海 忠勝



中 野 誠



中 野 健明



柳谷 謙太郎



周 布 公 平

歷代橫濱税關長



水 上 浩 綱



本 野 盛 亨



橋 本 圭 三 郎



有 島 武



山 崎 四 男 六



目 賀 田 隆 太郎

明治四十二年五月十日印刷  
明治四十二年五月十五日發行

定價上下二冊金拾圓

著者 肥塚龍

東京市赤阪區一木町六十三番地

發行者 川本三郎

橫濱市本町六丁目七十六番地

發行所 橫濱商業會議所

橫濱市本町六丁目八十四番地

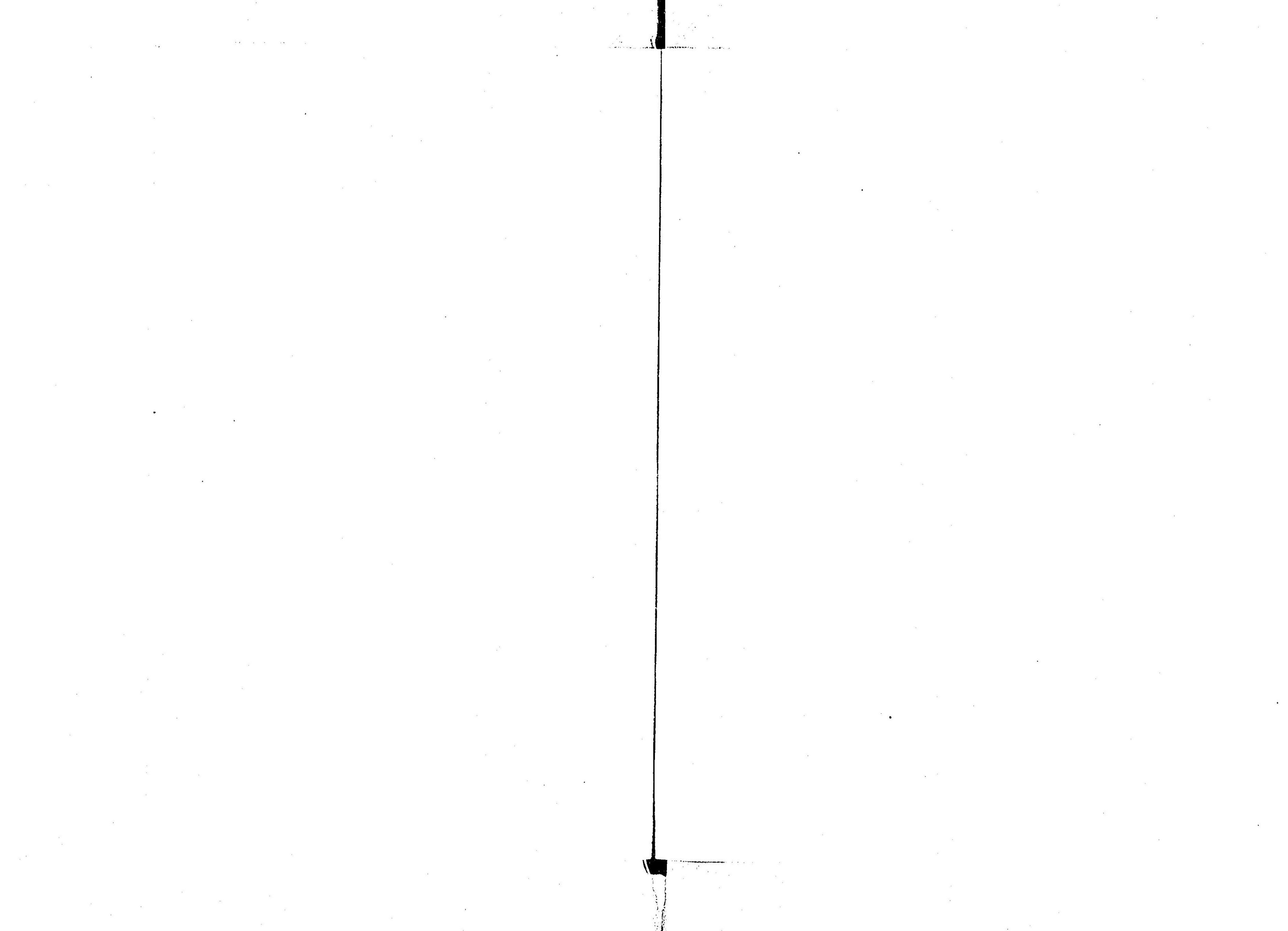
印刷者 田山宗堯

東京市日本橋區數寄屋町一番地

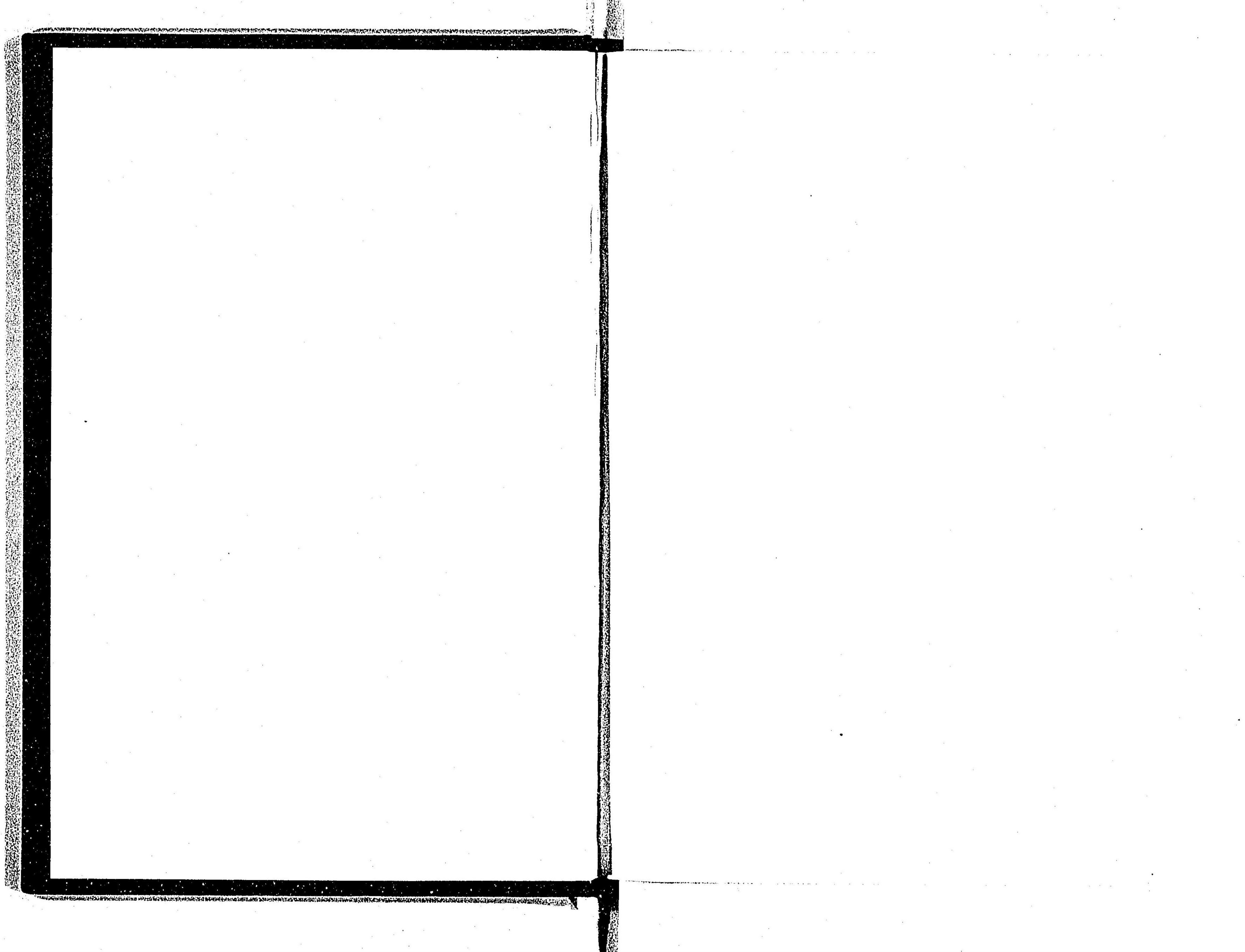
著作權所有

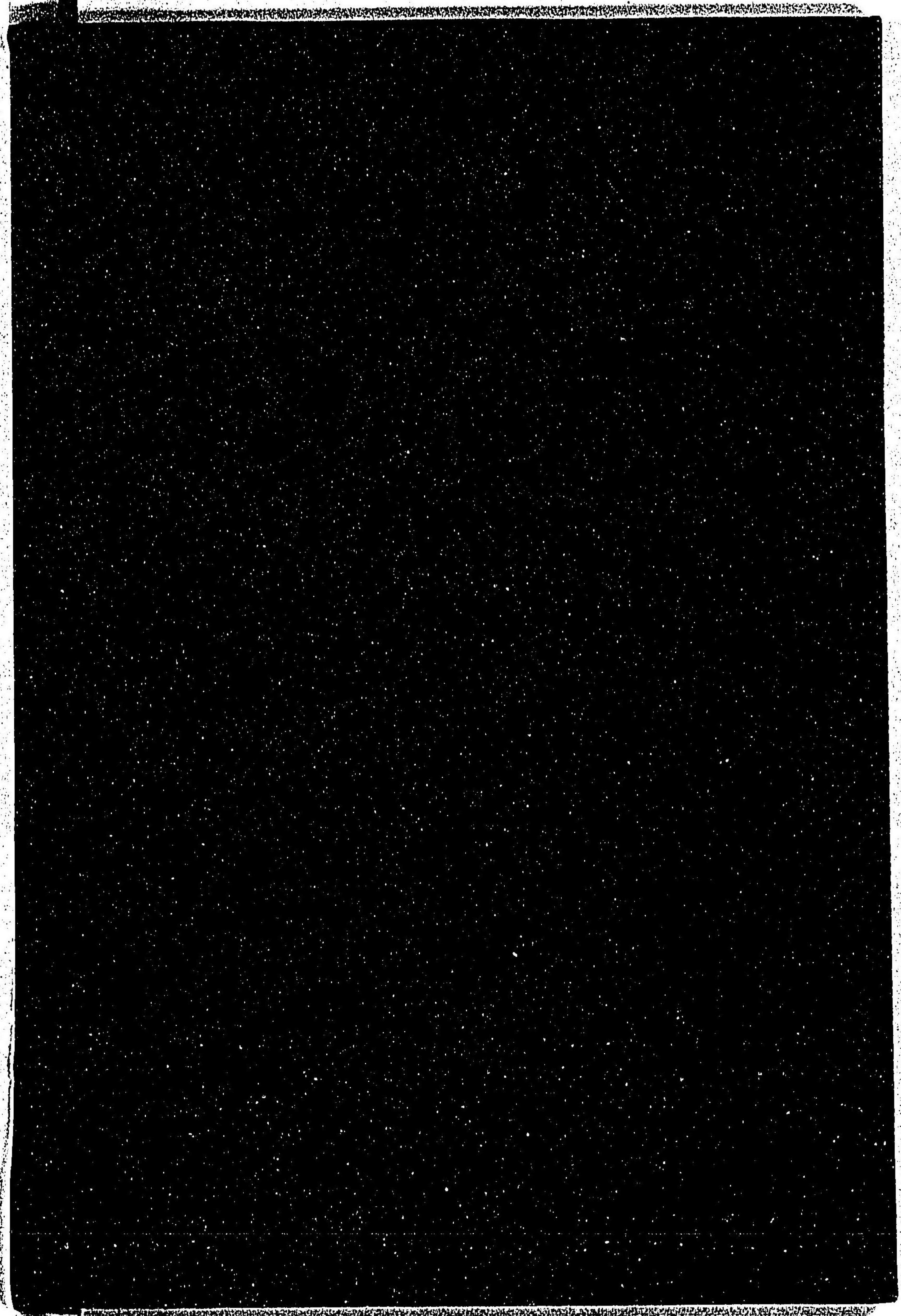


I-3E26









213.7
Ko495y
Y

